



### 《寒水大師と十一面観音》

九州北部豪雨災害被災地の朝倉市杷木寒水（そうず）地区からの復興への願いを受けて、《寒水大師と十一面観音》を制作させていただきました。素材は、災害直後の2017年7月に、朝倉市の流木集積所で取得した檜（ヒノキ）です。「人々の心を癒してくれるもの」として、被災地支援はもちろん、疫病に苦しむ世界の人々の平安を祈り、心をこめて作りました

「大師像」は「行基(668-749年)」をモデルにしました。朝倉には行基が作ったとされる日本最古の木造建築「普門院」(国指定文化財)があります。普門院は、天平19年(747)聖武天皇の勅願をうけ、行基が筑後河畔に創建したものが、度重なる水害のために現在地に移築されたものと伝えられています。彼は灌漑・治水工事を行い、水害から民衆を救いました。行基の蓮の葉は、水害から人々を守ったことを示唆しています。蓮の葉は、英彦山(朝倉は古代の英彦山神領)の鹿の角から彫り出しました。意匠は、英彦山の天忍穂耳命(アメノオシホミミノミコト)像を参考にしつつ、童子や地藏菩薩のような癒しのイメージも表現しました。「杷木神社縁起」では、「アメノオシホミミ命が、オオナムチ命に農業の知識と馬枒を授けた。オオナムチ命が大きな檜の枝にその馬枒をかけ、そこに鎮まり給うたのでそこを把の来た山(把来山)と呼んだ」というのが、杷木の由縁だそうです。

「十一面観音菩薩像」について、十一面観音様は、水害から救済してくれるお力があるそうです(水瓶をもっている)。中世では山に対する治水の願いをこめて十一面観音を祀る事例がみられ、神仏習合時代の奈良県三輪山の大神(おおみわ)寺には十一面観音が御本尊として祀られていました。私も、朝倉地区の治水への願いをこめて、彫りました。

泥だらけだった災害流木でしたが、彫り進めると美しい木肌と香りが現れ、救済を象徴するものへと変化していきました。制作中、九州を大雨が襲った際は、十一面観音様の真言「オン マカ キャロニキャ ソワカ」と唱えながら彫りました。豪雨災害の苦しみが、少しでも和らぎ、癒されることを心から願っています。この十一面観音像の右手は「与願印」です。この二つの彫刻が、被災地の皆さんに希望の心を与えるものになることを祈ります。

2021年10月吉日 (九州大学 知足美加子)

# 救いのお堂 よみがえった仏像



豪雨直前の体像を語る塚本深子さん（左）と寒水地区の住民たち。今もまだ「土庫」集まってお茶飲んでいる



朝倉を豪雨が襲った2017年7月5日夜、降りしきる雨の中、塚本さんが家に水がたまりだす。夫は庭で作業している。突然濁流が押し寄せた。夫は流された。「1階に逃げた」と隣の人叫ぶ。庭の小屋の小窓を方リン田でたたき割り、よじ登って隣に逃げ込んだ。

## 地区内で犠牲者出す

3年前の九州北部豪雨で、お堂と流された福岡県朝倉市の仏像が、新たによみがえった。お堂のおかげで助かったと信じる住民ら、支援者が、偶然のタイミングでつながった。木目の浅く小さな仏像が、福岡市の九州大芸術工芸院の一室にある。1体はハスの葉、1体は水がはしり、1体は水車を守り、1体は「水車から人々を守りてほしい」という祈りを込めて、彫刻家の知不足美加子教授が彫り上げた。朝倉市柁木寒水の塚本深子さん(左)は、自分たちで何とかせよと奮闘していた。ありがたいです」としみじみ話した。

# 北部豪雨被災の朝倉 つながった縁



知不足美加子教授が豪雨による流木から彫り上げた大師像(左)と観音像=福岡市南区の九大大橋キャンパス(右)赤堂と呼ばれるお堂があった場所を指す塚本深子さん。塚本さんの後ろのあたりに自宅や小屋があった=福岡県朝倉市柁木寒水

今年2月、寒水の支援団体の倉庫で、塚本さんから地区の女性4人が避難先から集まり、お茶を飲んでいた。お堂が集まった時、ちょうど寒水の区長である満生さんが顔を出した。支援団体の菅文さん(左)は、お堂の手がけの知不足さんのことを思い出して、その場で電話をかけてきた。たまたまその日、知不足さんは知人の山の木を移植するため朝倉に来ていた。寒水まで通った時にスマートフォンが鳴った。不思議な縁を感じ、その足で立ち寄った。5分で現れた知不足さん(右)は、お堂の製作、自宅です。お堂には大師像と観音像があったという。知不足さんは豪雨による流木のヒノキを運び、仕事のかたわら彫り始めた。数年かかるはずだったが、まもなくコロナ禍で外出自粛に、自宅です。製作し、半荘では彫り上げた。ハスの葉と水がめは、修験道で知られる英彦山(福岡県杵臼郡)のシカガの角で造った。知不足さんは英彦山の山伏の子孫。災害の音みががしでも癒えるように、祈りながら彫りました。見た人の気持ちに寄りかかると願う。お堂や塚本さんがあつたところは更地が広がる。地区にだけ人が戻るか分からないが、お堂の再建は実現に近づいた。「住民が日々の暮らしに感謝し、集まれる場になる」と満生さんは信じている。(渡辺純子)

## 流木使い無償で制作

けようになつたときに、近所の洋食店に逃げ込んだ。流された夫も、下流で近くの人が助けられた。電話コードにつかまり、無事救助された。人影が見えなかった。「赤堂」と呼ばれるお堂があり、塚本さんがお花やお餅を供えていた。流木を見聞できたと思いつつ、その夜、避難した洋食店の店主満生直樹さん(右)に体験を話した。満生さんも水が止まったことを全く想像してなかった。「さうさうさんか助けてくれたんですよ。落ち着いたら再建しよう」とうそで話した。お堂は彫形もなく流されたが、この日寒水で難者は出なかった。

朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

2020年10月9日朝日新聞夕刊 (記事 渡辺純子)

# ひと

## 被災地の木で彫刻をつくる九州大教授

ともたり 知不足 美加子 さん(56)



静かな笑みをたたえた観音菩薩やクスノキの香りが漂う龍。豪雨災害で根こそぎ流された木にノミで新たな息を吹き込む。「私のアートは『手あて』なんです。手のひらぶんの温かさが届いてくれば、それでいい」。九州大学芸術工学研究院教授の彫刻家、修験道で知られる英彦山(福岡・大分県境)の山伏の子孫

だ。自然を敬い自然と共に生きて先祖の伝統は廃仏毀釈で途絶え像や道具は壊された。「昨日あったものがなかったものにされた」。そう深く感じて育った。29歳で大学に職を得た頃、家系のごとは伏せていた。だが、先祖伝来の地を追われたアイヌの人々との出会いが転機に。相次ぐ災害で家や故郷を奪われた人々の姿も先祖と重なった。2004年の新潟県中越地震で被災した旅館に木彫りの牛を贈り、11年の東日本大震災後は福島に野菜を送った。4年前に地元で九州北部豪雨が起きた。山から流された木の集積所を歩きクスノキを回収した。龍を彫り上げ、被災地の小学校に贈った。お堂ごと流された観音像も復元。倒れた木々の形を変え、その地に生かすことが「記憶の道しるべ」になると信じる。木にノミを当てると「こうなりたい」という意思を感じる。「自分一人の力じゃない。私の作品と言っていいんだろうかという感じです」

文 渡辺純子 写真 藤原正真

朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

2021年9月17日朝日新聞朝刊 (記事 渡辺純子)